日本総研 リサーチ・アイ
The Japan Research Institute, Limited

No.2010-050
2010年11月29日
http://www.jri.co.jp

減少した産油量

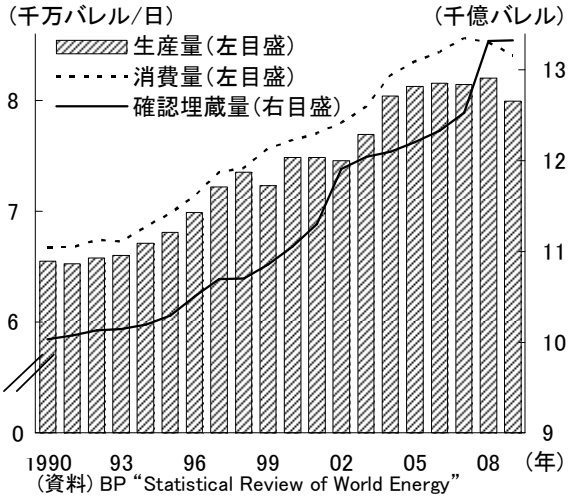
～ 増産余地が後退するなか、需給タイト化と価格上昇が視野に ～

（１）2009年世界の産油量が減少（図表１）。確認埋蔵量の増勢が続いており、産油量の減少はリーマンショックを映じた消費減が主因の見方も。しかし国際エネルギー機関（ＩＥＡ）が今月公表した長期エネルギー見通しによれば、増産余力の低下が主因。ＩＥＡは、2006年を世界の産油量が最大となるオイルピークとし、今後の産油量は中期的にピークを若干下回って推移と展望（図表２）。

（２）もっとも、その前提は今日、発見済で未開発の油田に加え、現時点で未発見の油田を含め新たな油田開発によって産油量確保。現在稼動中の油井に限定すれば１日当たりの産油量は09年の68百万バレルから35年には16百万バレルに減少する見通し。逆算すると、日量52百万バレルは今後開発される油井から生産するシナリオ。前提条件に着目すると産油量の維持は必ずしも容易でなく、今後、需給がタイト化し、価格が上昇に向かう展開を否定できず。

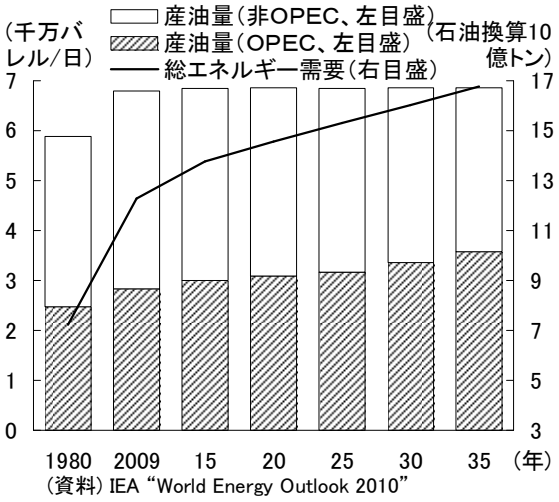
（３）一方、世界のエネルギー需要は、ハイペースで成長する新興諸国の旺盛な需要増のもと、今後も中期的に増大する見通し（図表２）。産油量の大幅増加が期待薄ななか、天然ガスに加え、原子力発電や再生可能エネルギーのウエイトが増加する見通し。まず原子力発電では新興国を中心に発電所建設が中期的にハイペースで持続（図表３）。再生可能エネルギーについても、従来の欧米に加え、近年では中国やインド、ブラジルなど新興国で投資が盛り上がり（図表４）。資源エネルギー転換は有力な成長戦略であると同時に、資源小国のわが国にとって不可欠の生き残り戦略。

（図表1）原油の生産・消費量と確認埋蔵量



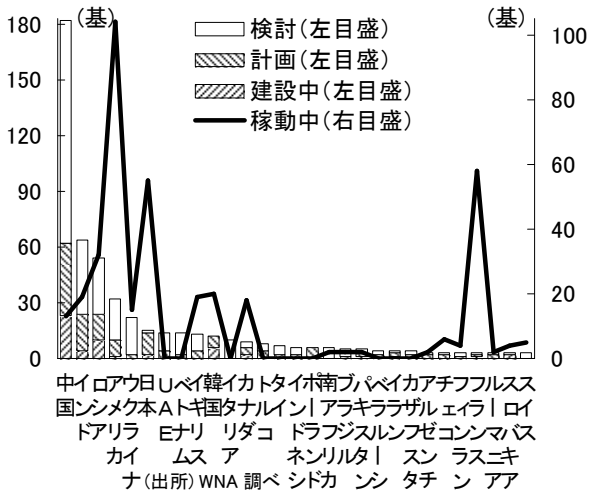
（資料）BP “Statistical Review of World Energy”

（図表2）産油量と総エネルギー需要の展望（IEA）



（資料）IEA “World Energy Outlook 2010”

（図表3）国別原子力発電所数


（基）
（基）
検討（左目盛）
計画（左目盛）
建設中（左目盛）
稼動中（右目盛）
中国 インドネシア ロシア 日本 ウクライナ ベトナム ベラルーシ（出所）WNA 調べ 韓国 イギリス カナダ ルーマニア ブルガリア ハンガリー ポーランド ブラジル ドイツ ベルギー アルゼンチン